

SFセミナー2006レポート

監修: 向井 淳
井手聡司 / 大澤和彦 / 小川 隆 / 代島正樹



去る5月3日、東京は御茶ノ水にて、例年通りSFセミナー2006が開催されました。SFセミナーは毎年ゴールデンウィーク頃に開催されているSFコンベンションです。

4月末から天候にめぐまれていなかったのですが、この日は、数日前までの雨模様が嘘のように晴れ上がりました。それもあってか、今年は例年を大きく上回る人数のSFファンが参加し、様々な企画を堪能しました。

参加されなかった読者の皆さんへは当日の雰囲気伝え、参加された方にはその記憶を今一度振り返るために、このレポートをお送りします。

[文: 向井淳]



ウブカタ・スクランブル

出演 沖方丁、柴田維 (TOE)

司会 三村美衣



作家・沖方丁氏が提唱する「文芸アシスタント制度」。創作の世界における後進の育成と、作業の効率化を目指して立ちあげられたこの制度への強い思いと苦難の道程が熱く語られる。



異色作家を語る～国内作家編～

出演 牧眞司、長山靖生、日下三蔵

司会 代島正樹



いわゆる「異色作家」、日本で言えば誰がそれにあたるのだろうか？ 近年再発見、再評価の動きが進む彼らを紹介するとともに、夏目漱石や内田百閒の異色作品についてもとりあげる。



小説もある。例えばバラードを今読むと面白い現代小説として読めるようなものであり、不思議小説として再評価すべきでは。また河野典生には詩的かつシャープな短篇がある」と説明。また、一冊全部が異色作品という短篇集が少なく、例えば筒井康隆などはそのせいで一冊に絞り込めなかった、とコメントされました。

戦前の作家ばかり選んだ長山さんは牧野信一などを薦めてくださいました。またアンソロジーは、知らない作家を教えてもらったりそのラインナップと照らし合わせることで自分なりの作品の評価の仕方を見つけられる、とコメントし「アンソロジーで初めて作家の名前を知って世界を広げていく」という場合に信頼できるアンソロジストとして鮎川哲也、紀田順一郎、滝澤龍彦、横田順彌の四人の名前を挙げました。

ホラー系の作家を多く選んだ日下さんは、生島治郎、遠藤周作、曾野綾子などによる世間の作家イメージとは変わった内容の短篇集を薦めてくださり、中でも一番の隠し球として畑正憲のSFとホラーの短篇集『ムツゴロウの玉手箱』（角川書店）を評価しておられました。また異色作家としては香山滋、城昌幸もオススメだそうです。

その他にも牧さん、長山さんの「こんなアンソロジーがあったら嬉しい」といった話や、日下さんのアンソロジストとしての苦労話など話題は尽きませんでした。最後に牧さんから、今後に期待する現代の若手異色作家として、三崎亜記、倉阪鬼一郎の名前が挙がり閉幕となりました。日下さんのアンソロジーも企画進行中のものが多数あるそうで、今後も異色作家の復刊・再評価作業はまだまだ続いていきそうです。

〔文：井手聡司〕

■ウブカタ・スクランブル

●出演：沖方丁、柴田雄二、T.O.E.

●司会：三村美衣

本会三コマ目の企画は、「ウブカタ・スクランブル」と題して、作家の沖方丁さんが最近追求されている出版の新しい形の可能性を探っていくという企画でした。出演は、沖方さん御本人と、沖方さんをサポートされているティール・オー・エンタテインメントの柴田雄二さん。司会には本誌でもお馴染みの三村美衣さんです。

まず、司会の三村さんの方から、昨年一月に池袋で行われた『ライトノベル☆めった斬り』（三村美衣・大森望共著）のトークショーで沖方さんから出された二つの提言がまとめられます。一つ目はライトノベル業界が新人を育成せずに使いつぶしていく構造にあるということ。そして二つ目が、ライトノベルは一種のサービス業であって、良いものを安く速く大量に提供しなければならぬが、それをどうにかして人海戦術を取らねばならず、それをどうにかして小説を書くという行為と結び付けていかなければならない、というものでした。

この提言を実現させるために、沖方さんたちがまず始めたのが「文芸アシスタント」の制度です。沖方さんによれば、この制度の目的は、自己の作業の効率化を図りながらも、「活字を表現媒体として選ぶ」人間を、メディアを問わず育成し業界に貢献していくことにあると語ります。そのために、文芸アシスタントには資料を探したりキャラクターを設定したり世界設定を考えたりする作業を各々の適性に従ってやってもらうつもりだったそうです。

その「文芸アシスタント」の募集の受け皿となったのが柴田さんの所属するティール・オー・エンタテインメントでした。沖方さんの考えるシステムをビジネスに変えることが自分の仕事だと考えたと語る柴田さん。社会的信用が得られるから会社という形を利用したが、インターネットがある現在では募集を行う場所はどこでも良かったそうです。ある日、突然ティール・オー・エンタテインメントのホームページ上に「沖方丁文芸アシスタント募集」の告知が出されただけで、その他の告知は一切なし。この募集の仕方は現在の常識から考えるとかなり型破りなものだったようです。しかし、それでも六十件ほどの応募があったという結果に驚く三村さんに対し、柴田さんは自分たちの世代の感覚ではそれほど不思議なことでもないと言います。柴田さんたちにとって、ネットで何かをすることはそれほど特別なことではなく、そうであれば、同じ考えを持つ若い人たちはきっといるだろうという感覚を信じて行った結果であると言っていました。

しかし、作家を志す人たちはやはり自己が強く、誰かと組んでの仕事をしたがらないのではないのでしょうか？ この三村さんの疑問に対して、沖方さんは今のところそれほど生じていないと答えます。それは、作家は個人に評価が集中する職業ではあるけれども、内実は十分に集団的であり、孤独の中で作業するものではないからだそうです。

当初の心積もりでは一人か二人の予定だったそうですが、今現在、文芸アシスタントの方は五人。ある種のレッスンのような過程も通した後、彼らを投入したのが、この夏からWOWOWでアニメが始まる「シュヴァリエ」という作

品になります。文芸アシスタント制度がシステムとして整ってから仕事を請け負ったわけではなく、ある意味見切り発車に近い状態で始めたため、整えながらの実作業ということで相当大変だったようです。

柴田さんによれば、文芸アシスタントを小説執筆の場で使おうとする場合、アニメの制作のようにシリーズ構成の下で各話をそれぞれ脚本家が執筆するという形が理想として考えられます。しかし、実際に今の段階でそんなことができるはずもなく、できる限りの作業を各個人の能力を踏まえて任せながら、必死でそのタオリティを上げていくという方法を取らざるを得ません。その中で柴田さんの重要な役割として挙げられていたのが、沖方さんとアシスタントの間をつなぐ役割です。常に時間に追われていく実際の創作の場では、相手の気持ちを感じ取っている余裕はなく、その結果人間関係に齟齬をきたしシステムが崩壊してしまいう危険性をはらんでいます。柴田さんが間に入ることで、それが回避されているということでした。

人間関係ということ言えば、現在でも作家は編集者に育ててもらっている側面が大きいわけですが、それは同時に編集者との相性が悪ければその時点で終わってしまう職業であるとも言えます。沖方さんは、そのような事態を回避するためだけでも文芸アシスタント制度は有用であると語っていました。

昨年の提言では、文芸アシスタントの導入によって週刊で小説を出せるようになると言っていた沖方さんも、実際にやってみて十年はかかるという実感を得たそうです。しかし同時に、十年後にはアシスタントを育てるということが常識化しているだろうとも述べます。そして、



▲「シュヴァリエ」(8月19日19:00より、WOWOWにて放送開始)

©沖方丁・Production I.G / 「シュヴァリエ」製作委員会

人材育成のサイクルが巧く回るようになって、共通認識が出来上がれば、週刊というスピードを提供できるようになるはずだと語っていました。そしてそれは、時間はかかりつつも確実にものになりつつあるそうです。ただ、一方で沖方さんには非常に負担がかかっている様子で、やはり一から何かを作り上げるといったことの苦勞は並大抵ではないと感じました。

さて、企画の最後には今後の話が語られました。現在、沖方さんが文芸アシスタント制度を様々な作品で使っていくとともに、柴田さんはそのシステムを一般化すべくティール・オー・エントテインメントで新しいプロジェクトを始められているようです。これから十年、お二人の追求する新しい出版、創作の形がどうなっていくのか、沖方さん御本人の今後と共に目を離せません。

【文：大澤和彦】

ワン・ヒット・ワンダー・オブ・SF

●出演：ジーン・ヴァン・トロイヤール、

中村融、東茅子

●司会：小川隆

この日の最後のプログラムは、来年横浜で開かれるワールドコンにそなえて、バイリンガルのパネルでした。当初予定されていた外国人ゲストが諸般の事情によりこれらなくなってしまうのが残念でしたが(期待しておいでいただいた方にはたいへん申し訳ないことをしました。お詫びします)、本誌でもおなじみのジーン・ヴァン・トロイヤール氏がいかにもアメリカ人らしい視点を提供してくれて、多少なりともワールドコンのパネルの雰囲気は味わえたのではないのでしょうか。

さて、企画タイトルは洋楽ファン以外にはちょっとなじみがない言葉ですが、要するに一発屋のこと。ポピュラー・ミュージックの世界では誰もが知っているような名曲をヒットさせながら、そのまま終わってしまうアーティストが多く存在します。ところが、SFでも同じようなことが起こっているのではないかと、とくに短篇では、一作だけでしか名を残さなかった



▲「冷たい方程式」